2003年11月1日
毎日新聞より。

みんな一緒 バリアフリー新世紀

温泉にゆったりつかりたい

乳がん術後 入浴着の工夫など取り組み進む

温泉にゆったりつかりたい。でも、乳がんの手術跡が気になって入れない。こんな悩みを抱える患者たちの声をきっかけに、温泉を積極的に楽しむための取り組みが広がっている。【清水優子】

入浴着を身につけ、温泉を楽しむ加藤ひとみさん（右）。「入浴着への理解をもっと広めたい」

加藤ひとみさん(49)＝長野県上田市＝は97年、乳がんで右乳房を全摘出した。温泉好きだったが、術後は傷跡が気になり、たまに出かけても人目につかない深夜に入ったり、脱衣所では隠れるように着替えた。

「温泉用のブラジャー」があれば、友人や家族とも安心して入れるのに」。患者仲間の一言がきっかけで、子宮がんを患った姉の小林光恵さん(52)と協力して、肌色の特殊なメッシュ素材を使った入浴着（3800円、☎0268・26・6789）を考案。速乾性で入浴後も脱がずに服を着られるので、人目に傷跡をさらさないで済む。

しかし、入浴着での入浴を断られることも多かった。衛生面の配慮から、県条例が手ぬぐい類の持ち込みを禁じているからだ。このため、信州大へ入浴着に残るせっけんの量などの分析を依頼。結果を長野県へ提出したところ、「衛生上問題なし」と認められ、県は各保健所へ文書で通知した。

それでも無遠慮な視線に戸惑うことは多い。加藤さんは入浴着への理解を求めるポスター約3000枚を県内の温泉に配り、脱衣所に張ってもらっている。「傷を隠さず堂々と入るのが理想だが、強い人ばかりでない。心の負担を少しでも和らげられれば」と話す。

大分県別府市旅館ホテル組合連合会（142軒、☎0977・22・0401）は昨年4月から、乳がんの患者に貸し切りで大浴場を楽しんでもらう「ほっとマンマの日」を設けている。「マンマ」はラテン語で「乳房」。土曜日を除く日中の2～4時間、協力する11軒の旅館・ホテルのいずれかに有料で入れる。

会員の目印「ピンクのタオル」を手にする俵朋子さん。「温泉に入りづらいというもの内のバリアと、温泉文化のバリアを取り払いたい」と話す

「タオルで隠す自由を」

持ち込み許可働き掛けへ

俵朋子さん

「貸し切り入浴や、入浴着で傷を隠すことで温泉に入れる患者さんが増えるのはいいことでも、できるだけ素の状態で入浴するのが本当のノーマライゼーションです」

こう強調するのは、評論家の俵朋子さん(72)。96年に乳がん手術で右乳房を失った。「大好きな温泉に入る勇気がなくなり、死ぬまでに一度でいいから、ゆったり温泉を楽しみたいと願うようになった」と打ち明ける。

同じ思いを抱える患者たちと、01年11月に「1・2の3で温泉に入る会」（本部・群馬県）を結成。全国11支部に約370人の会員がいる。

毎年、温泉地で全国大会を開いているが、会員との交流で問題点が見えてきた。まずは脱衣所の設計。「衆人環視の中でブラジャーを取る瞬間の恐怖。女同士でも視になる緊張感やストレスは想像以上。あざやけど、人工肛門など体に傷があればなおさらで、仕切りカーテンを付けてほしい」と訴える。

一般客が傷跡を見た時の反応も気持ちを暗くする理由の一つ。無用なトラブルを避けるため、会員を識別するピンクのタオルを作製。しかし、浴槽内への持ち込みが許されず、背中を向けて入るなど傷を見せない苦労でかえってストレスをためた。「たった1本の手ぬぐいで温泉がゆっくり楽しめる。隠す自由を認めてほしい」と話す。今後は温泉の設計改善やタオルの持ち込み許可を求め、関係団体などに働き掛けたいという。

同会は16、17の両日、岐阜県の下呂温泉で全国大会を開く。参加には会員手続き（6000円）と参加費1万5000円が必要。申し込みは5日までに事務局☎027・288・7000へ。